

京鹿子

平成二十七年二月一日發行
通卷一〇八六號(臨時)第一號(日刊)



2月号

豊 田 都 峰

叡林集 その二

と
ろ
ろ
汁
山
の
深
さ
も
味
と
し
て

思
惟
仏
の
時
空
隈
な
く
紅
葉
界

比
良
よ
り
の
風
の
か
た
ち
に
芦
枯
る
る

芦
枯
れ
て
小
さ
く
白
日
か
か
げ
け
り

着
水
の
白
鳥
光
ま
み
れ
な
る

白
鳥
の
眠
る
や
星
の
降
り
は
じ
む



短日をのせる流れのうすひかり
短日の頼まれごとを灯にはたす
雪催漁港は今日をしまひる
赤き灯は港あたりか雪催
寒肥や山の鳴る日の麓なる
寒肥や祖より幾世のこととして
何ひとつ疑ひのなき日の枯木
丘の句碑冬のひなたをひとりじめ

秀華採集

水澄むやアクセサリーは控へ目に

木戸渥子

自然の存在、真善美と解釈してもよい、いずれにせよそんな自然に対する時の作者の姿勢、なるべくそのままを受け入れたいという思いが具体的に作品にある。心にあるものがあれば作品は偽らない。

ちちろ鳴く便箋はまだ引出しに

上野紫泉

一景の中に吾も居て紅葉映え

北村道子

まだ対象から得たものの纏まらない状態のひとつの具体的な表現。後句の自分の客観的な把握がよい組み合わせをもって詠われている。



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

正月様

正月様さてそれからの御燈明 (正月様は歳徳神のこと)

羊日と謂ふ名の日和やはらかし

元旦に一つ歳とるむかしごと

— 追懐 — (その六)

黒猫の視点の中の冬の葬 [平成三年作]

冬の蝶けふも舞ひくる動機あり [平成三年作]



— 近 詠 —

和 田 照 海

雁のころ

四捨ならず切手貼りたす雁のころ
雁渡り来てより波の尖り癖
母の忌や問はず語りに狐火など
来し方は水のごとくに赤のまま
隠田の案山子某日つかひ切り



神麓集

冬菜鍋 藤岡紫水
望郷や兎追ひたる山は墓地
着ぶくれて見栄外聞の埒外に
車座の芯煮立てをり冬菜鍋
夕月を天心に置き浮寝鴨
暮れ早し閑人閑をもて余す

地酒の里 松本鷹根
回想は虚し魯田穂を急ぐ
咳をして鷺の抜き足犯しけり
鳶の輪の的のごとくに枯れに坐す
雨の日を湯気で称へて地酒の里
緋袴の冬陽しやりしやり比売の神

松田都青
時雨来る濡ればあの日が消えさうで
落葉焚くやうな余生にまた落葉
蟪蛄や密議のあとは高く跳び
小春日は急かす遅れず日が暮れる
三界の火宅を出でて神の旅

独り言 北川孝子
オムレッツを綺麗に返す夕時雨
独り言にひとり頷き夜のしぐれ
花終歳月人を待たざるよ
秋酣百円頑具のあれやこれ
忘れじの一景遙か月細る

晩年 丸井巴水
小豆もみ鶏冠燃やして素通りす
ため池の落し蓋なり紅葉山
踏切に独りたたずむ神無月
冬紅葉隔離病舎の碑は低し
楽しみは晩年に置き松手入

しぐれ虹 塩貝朱千
人に悲喜泡立草の径つづく
鳶の輪の小さし霧雨降り止まず
踏み入りて雨の花野に跳ねるもの
しぐれ虹ふくふく育つ京野菜
直角に曲れば並木もみぢして



作品6句

虫の移ろひ

鈴鹿 呂仁

蓑虫の暮れ六つをきく店仕舞
いぼむしり内弁慶の一本目
綿虫の野望のひかり臥龍廊
こほろぎの己が闇さへ訝しむ
閉ざさるる蝨斯の国なる目安箱

俳句界十一月号より転載

謎の号俳人俳名著名

語らひは雛雪洞の消ゆるまで

鈴木野風呂

鈴木野風呂
『京鹿子』副主宰

私の祖父鈴木野風呂は、明治二十年（一八八七）四月五日生まれの、本名を「登」という。祖父には男の子供が四人、男の孫が一人居る。その一人が私であるが、名前を付けたのが祖父と聞く。祖父は名前の一文字が好きであつたらしく皆一字である。私の本名が「均」、「父が「仁」というように。俳号の命名は別で、祖父がまだ二十代後半の頃は「鬼骨」と名乗っていたようだ。この名前の由来は、未だにわからない。祖父は、大学を卒業すると中学

京都府上京区（現・左京区）生まれ。本名、登。京都帝國大学文学部国文学科卒業。「ホトトギス」に投句、1920年日野草城編集で「京鹿子」創刊。32年組織改編、同人制を廃し、野風呂が主宰。戦後48年1月号より復刊、次男の丸山海道を編集に迎え、没年まで主宰として指導。句集に「野風呂第一句集」ほか。

の教師となり鹿兒島の川内中学校で教鞭を執ることになる。この時、山好きでもある祖父は学生を連れ近くの紫尾山に登山に出かけた。何分当時の田舎のことで、三人五人と分宿し野天風呂で湯桶を外へ持つて出て風呂へ入ったそうだ。その時の情景は、月が出ていてザボンが累々と実っており、素晴らしい風景で忘れられず、野風呂と名乗る事にしたと本人が記している。当時の俳号の命名が、本名を振る風潮があつたことも見逃せない（高濱虚子↑清）。

この風呂は、ドラム缶と言われている。

月刊俳句会 12月号より転載



京鹿子集

豊田都峰選

水澄むやアクセサリーは控へ目に

かまきりやぐつと恠えて関節痛

眩暈や萩のほころびはじまれり

なんとまあ読めて書けぬ字落葉掻き

ちちろ鳴く便箋はまだ引出しに

露天風呂錆蝕のさび流れゆく

木の実降るまばたき始む磨崖仏

蘆の穂絮揺らしてゆくや梓川

一景の中に吾も居て紅葉映え

秋果むき話は佳境老姉妹

京都 木戸 渥子

習志野 上野 紫泉

京都 北村 道子

木に一つ残して軒の吊し柿

知らぬ人傘に入れと村時雨

振り返り砂漠の韋駄天青蜥蜴

秋の声ここ日本かと目を覚ます

虫の音も共に野外コンサート

見上げれば祖国と同じ星月夜

グローバル日本の柿や店頭に

柿食めど鐘は聞こえぬ外つ国よ

柿の赤次次浮ぶ友遠く

柿剥きや器用な婿の腕自慢

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子